



CONDENSED CONJUGATION NEWS Vol.10

若手会の活動

橋本 顕一郎（東京大）
須田 理行（京都大）
酒巻 大輔（大阪府立大）
深澤 愛子（京都大）



Condensed Conjugation for Rising Generation

高密度共役若手会のロゴマーク

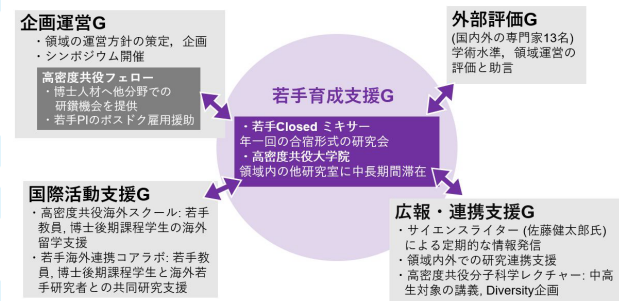
本領域では、若手研究者(大学院生、ポスドク、若手スタッフ)の交流と人材育成を目的とした組織として「**高密度共役若手会**」を設置しています。今回はその活動について、世話人のみなさんにお話を伺いました。

——まず、若手会の意義、目的などからお願いいたします。

橋本 本領域は、主に構造有機化学と物性物理学の研究者が集まっており、両分野にはやはり価値観や文化の違いがあります。そこで若手会では、両者の融合を強く推進することで、異分野間での価値観の共有や、斬新なアイデアの創出を触発したいと考えています。また、複数の学理を身につけた“Translational”な若手人材の育成も、重要な目標です。

対象となるのは、准教授・助教・ポスドクから大学院生まで、45歳前後までの若手研究者です。彼ら研究の現場を支える若手研究者の相互交流により、共同研究をボトムアップ的に推進していければと考えています。

高密度共役若手会の取り組み



——世話人のメンバーは？

橋本 メンバーは、世話人が私橋本顕一郎と酒巻大輔さん、須田理行さんと、私が代表を務めております。その他、7～8名の准教授や助教クラスのメンバーがスタッフとして加わり、アドバイザーとして深澤愛子さんに入っています。

深澤 私は領域の本部との連携を行う他、領域全体の広報担当も務めているので、若手会の活動の発信もしています。その他、こういう企画をやったら面白いんじゃないかということを、好き放題発言しております(笑)。

——コロナ禍で、ミーティングなどはみなさん苦労されていると思いますが、世話人の間での連絡はどのように？

橋本 ふだんはSlackなどの連絡ツールを活用しています。また、ZoomやoViceなどのオンラインツールを使った会合も試してみて、ざっくばらんに意見交換をしています。

——通常であれば、どこかに泊りがけで若手の会開催というのが定番ですが、現状ではオンラインでしょうか？

橋本 7月に、オンラインで初めての研究会を行いました。外部講師の講演、若手のみなさんのポスターセッションなどを実施し、夜からは懇親会も開催しました。

——どのような形式だったのでしょうか？

橋本 100人以上が参加し、外部講師の講演はZoom、ポスターセッションと懇親会はoViceを使いました。

※oViceはバーチャルオフィスとして開発されたコミュニケーションツール。自分のアバターが室内を自由に移動でき、近くにいる人の声は聞こえるが、遠くの人声は聞こえない仕様で、多

数での交流会に近い雰囲気でのコミュニケーションができる。



ポスターセッションの画面

深澤 ポスターセッションでは、各部屋に入ると発表者がいて、面白そうな発表があったら近くに行くと、発表者の声が聞こえてくる感じです。Zoomでもブレイクアウトルームをたくさん作って、各部屋で発表を行うようなことはできるのですが、それですと演者が何度も同じ発表を繰り返すだけになりがちです。リアル学会での形式に囚われず、自由な議論ができるというポスター発表の本来の良さを実現するために、今回のセッションではもうひと工夫してみました。

——工夫というのは？

深澤 事前に一人5分のプレゼン動画を録画してWebクラウドサーバーに置いておき、参加者はあらかじめそれらの動画を見ておけるようにしました。それをゆっくり見た上で、その場では柔軟なディスカッションに時間を使ってもらえるようにしました。

——聞く方は、事前に興味のあるような演題を選んで聞きに行けるわけですね。

深澤 若手のみなさんは、この一見目新しいやり方にもすぐ適応してくれました。こんな学会があったらいいなというのを、試せる場にもなっていると思います。

橋本 また別のセッションでは、まず領域代表の関さんに講演をしていただき、それを元に「高密度共役とは何か」というテーマで、グループディスカッションしてもらおうということも行いました。なるべくA01～A04班のメンバーが各グループに均等に入るようにし、化学と物理のメンバーの交流を促すよう工夫しました。通常ですと、どうしても一つの分野のことしか知らないままになってしまいますから、こうして早いうちに違う分野を知ることは意義があると思っています。

深澤 私の研究室の学生さんは、終了後とても楽しそうにしていました。最近はオンライン学会や講演会は多いのですが、交流という部分はなかなかできていなかったのが……。実際に手を動かしている人たちが、実際に言葉を交わして仲良くなることは、とても大事だと思います。「こいつのためなら一肌脱いでやるか」と

いうような思いがないと、共同研究はやはりうまく行きません。彼ら同士が自分から交流して、創発的に物事が進む形になれば理想ですね。

——研究者同士の「雑談」がいかに大事だったかにみなさんが気づき出しています。どうやって雑談ができる状況を作るか、どこでも大きな課題ですね。

酒巻 ただ、以前もリアルな若手会などは、年に一度程度しかできていませんでした。オンラインなら気軽に高頻度で会合を持てますので、メリットもあると思います。

深澤 これから公募班のメンバーが入ってくると規模も大きくなるので、ほっておくと自然に相分離が起こってしまう。そこを偶然を装いつつ、どううまく混ぜ合わせるか、世話人の重要な役割になるかなと思います。各研究室に、若手会の窓口になる院生やポスドクの方を決めていますので、彼ら同士で話し合っって企画を立ててもらうのもいいかもしれません。

——若手同士の自発的な交流が始まればしめたものですね。その他にはどのような活動を？

須田 セミナー形式で、内外の講師にお話をいただくことも行なっています。たとえば、芸術と化学の融合をテーマにしたグループ「ARchemisT」の主宰者である、埼玉大学の古川俊輔さんにお話をお願いしました。若手会では、こうしたちょっと変わったキャリアパスの方にもお話をいただいたりしています。また、渡邊峻一郎さんのキャリアに関する講演や、深澤さんのデザイン講座もとても有意義でした。

——今後、別の活動の予定はありますか？

橋本 コロナ禍が明けたら、対面での合宿は必ずやりたいと思っています。また、領域内の他の研究室に長・中期間滞在できる「高密度共役大学院」という制度もあるのですが、これを活発に動かす仕組みを整備したいですね。

酒巻 学生が「この研究室に行って、こういう研究をしたい」と自薦できる制度があってもいいかもしれないですね。

深澤 私はこの領域のダイバーシティ担当という立場でもありますので、若手研究者のマインドセットを変えるような企画を行いたいと思っています。ここまでお呼びした外部講師の方も、男女半々になるようにお願いしています。演壇に立つのが男性のシニア研究者ばかりですと、若手女性は無意識に「ここは私たちのいる場所ではない」と感じてしまいかねませんので。

酒巻 公募班のグループも参入し、若手会参加者も一気に倍増します。マネジメントも難しくなると思いますが、何とか領域を盛り上げていける企画を考えていきたいと思っています。

もっと詳しく→ <https://x-con.jp/>